生活論

日本學生協會

特202
335

0051838000

0051838-000

特２０２－３３５

新学生生活論

日本学生協会

２版
昭和１５

AHN

生活論

特202
335

日本學生協會

はしがき

今日の日本の諸方面が殆どすべて根本的改革を要するやうに、學校教育もまた根本から改められる必要がある。さうして現代日本の危機を齎したものが各方面の無連絡分科の上に立脚した自由主義、個體主義であつたやうに、學校教育の缺陷もまたその個人主義教育思想とそれに立脚した個人主義的制度とである。これが改革されねばならぬ。

今日の學生には忠義といふことがわからなくなつてゐる。その原因も個人主義人生觀の徹底的浸潤にあるので、今日の流行日本主義者が凡て個人主義的道義觀にそ

の日本主義の哲學的基礎をおいてゐることが、改革に對する何らのモティーヴにならずにかへつて反撥されてしまふ理由である。個人主義的道義觀や英雄主義に基いた日本主義とか忠義の理論などゝいふものはウソであるからである。かういふ現代青年の上になげかけられる網の目のやうに細かい虚妄の幕をどうしてきり開くかといふことが、現代國民の凡べてに課せられた任務である。我らは率先して之を研究したのである。それを研究せずには呼吸することさへも困難に感じたからである。

人間の行動と生活との一切を支配する思想精神の問題が輕視されてゐる。人間生命そのものゝ領域とも言はるべきところが腐蝕されながら、なほ　皇道をとき忠節を論ずる。これ以上の脊理はない。學生生活の缺陷もこの根本問題から正されねばならぬのである。この困難な問題が如何なる方法によつて可能であるか。それは本書が凡ゆる方面から明らかにしようとした問題である。それは時代の叫びであり、時代の病苦の治療に關する處方箋でもある。

昭和十四年十月廿五日

編　者

目次

はしがき……一
一、新しき發程……一
二、「學問の基礎は日本國體に在り」とは如何なることか……四
三、諸道德序列の改更……九
四、「人格の陶冶」と「國家思想の涵養」……一三
五、忠の內容は具體的なり……一七
六、「個人人格の完成を目指す修養」と「全體沒入生活による修錬」との相違……二〇
七、現代高等專門學校生活の缺陷とそれに對する自彊的方策としての同信生活……二八
八、同信生活に於ける禮拜實修の意義……三一
　イ、禮拜實修について
　ロ、明治天皇御製拜誦について
九、和歌の創作と鑑賞の同信生活に於ける意義……四三
十、古典の意義とその研究方法……四八
　イ、古典の意義
　ロ、古典の研究方法
　ハ、外國古典研究の意義
　ニ、日本古典についての簡單な解說

新學生生活論

一、新しき發程

今や事變勃發より三ケ年に垂んとし皇軍百萬大陸に出動して皇威の宣布に一路邁進し、國内に在つても國家の總力を擧げてこの未曾有の偉業を達成せんとして、あらゆる困苦と缺乏とに耐へつゝ「かしの實の一つ心に」一致協力しつゝある。我等の同胞はあしたにタべに、絶ち難き恩愛の絆を斷つて一すぢに大詔をかしこみ大陸に出征しつゝある。我等の周圍に、また我等自らの目に耳に、見聞する所の幾多の悲しき、されど雄々しき出征軍人の物語、又戰場の美談によつて、日本國民は今や臣道實踐の感激に心魂をゆすぶられ、あらゆる部分的末梢的問題を打忘れて戰爭目的の貫徹に沒頭しつゝあるのである。この秋に當つて我等學生も亦、否國家生命を將來に支ふべき我等青年學生こそ、先づ第一にこの嚴肅なる現實に沒入し、之が正しき解決に挺身しなければならない。

防人の歌

今日よりはかへりみなくて大君の醜のみ楯といで立つわれは

千數百年の昔、我等の祖先が雄々しくも詠み出でし、この出征に當つての決意の歌を朗誦する時、長き歴史の流れを超えて我等の身に、心に、ひし〳〵と迫り來るものは、佯らざる日本人本然の心情である。この心こそ複雜多岐に發達せる近代武力戰の統一意志として、無敵皇軍の眞髓であると云ふことは、今次事變の現實的に實證する所である。乍然、この歌を讀んで感ずる感激は果して應召軍人のみのものであらうか。否、戰時平時のけじめもあらぬ不斷の國防意志こそが問題である。本來國民皆兵たるべき日本人にして、もと〳〵戰線銃後の區別のあらう筈がない。然るに我々は今この歌を心の底からの感激を以て歌ふことが出來るであらうか。

我々は先づ學生として我々に共通の體驗を回想することから始めよう。我々は小學校・中學校まで反覆教育勅語を暗誦せしめられ、その御精神は幼い心にも深く刻み込まれ、又祭日祝典に必ず奉唱せしめられる「君ケ代」の高き調べは、素直な心に永久の感激を與へたといふことを疑ふ人はあるまい。然るに一度中學校を卒業するや否や、直ちに實社會に飛び込む人は別として、所謂高等

教育を受ける高等學校、專門學校時代は果して如何。人は云ふ、この年頃は生理的にも心理的にも新しき飛躍をなす時期で、すべてを自主的に考へ又行動する。自由こそこの年頃の青年に取つての生命であると。かくて誤られたる自由觀は一切の過去を先づ否定することから始まり、特に小學校・中學校教育が主力を盡して教育した盡忠報國の精神をも一應は疑つてみて、より高い眞理といふことをもとめ摸索することを以て青年らしき眞摯の態度とするに至る。玆に所謂インテリと勤勞國民との生活感情の間に、覆ひ難いギャップを生ずる根本原因がある。學問とは、知識とは、果してかくの如きものであらうか。今や一億の臣民が齊しく背私向公の臣節を盡すべき秋、眞の學問とは何であるかを身を以て我等は究明しなければならない。

二、「學問の基礎は日本國體に在り」とは如何なることか

「人間は社會的動物である」とギリシャの先哲は云つた。ロビンソン・クルーソーの例を擧げるまでもなく、解放された個人といふものは寂寞の情に耐へずして殆ど生きる意志をすら失つてしまふ。個人のみの生活にはその樣に生の歡喜も又それ故の生き甲斐もなく、それは精神的には全く死と云つて差支へない。この樣に分離された個人は孤獨無力で到底生きるに耐へない。この無力感から發して人間は自己の生命を永久たらしめんとする共通の念願を持つ。それに應へるものが過去の諸宗教に於ける神の存在であつた。人類始まつて以來五千年の歷史に神の名の消えたことはない。キリスト教・佛教・回教・多神教等に於ける神佛がそれである。

この神に自己のはかない生命を托して永久に生きんとするのが、古今人類共通の念願であつた。しかしその念願は歷史の示すごとく現實國家社會生活の上には統一的に實現せられたことなく、僅かに各個人の心の中に觀念的抽象的存在として生きるに過ぎなかつた。しかしそれを何らかの形に

して敬仰し禮拜せねばやまぬといふのが、これ亦人間本來の心情に內在する念願であつたが故に、そこに佛像が生じ、教會が生まれ、僧侶牧師の出現を由來せしめ、禮拜儀式が整ふに至つた。乍然、心の底から何物かに歸依し、何物かに全心身を捧げようとする人間の意欲は、更に進んで自己の屬する社會、自己の營む現實的社會生活の上にまでも、その志を一貫して實現したいといふ欲求を生ぜしめるに至つた。こゝに卽ち、觀念的に祈る對象——卽ち神佛——を、具體的政治社會の上で仰ぐ所の對象——卽ち君主統治者——と一體たらしめたいといふやみがたい欲求が起る。こゝに祭政一致的政治社會の實現といふことが、太古以來一貫して人類共通の大理想であつたことを理解し得るのである。かつて人類が描いた如何なる夢想も、この大理想の實現をあえぎ求めた熱烈なる悲願に比すれば、相競ふべき何ものもないのである。

キリストが「神の國は近づけり」と云つたその神の國とは、西歐のいづれの社會に於て實現せられたであらうか。キリストと同胞であつたユダヤ民族は果してキリストの志を幾何か受け繼ぎ得たといふことができるであらうか。ユダヤ民族は祖國滅亡してすでに故に二千年、今日も尙神の國を夢想することによつて民族的團結を保ちつゝあるが、彼等の描く神國とは、世界の怨憎と嫌惡の的

たるその道義的頽廢、反人道的詐謀より見ても、すでにこの世に實現せられ得ぬ、否實現を許し得ぬ願望であると云はねばならない。そして又ソクラテスが自らの生命を托した祖國アテネは、すでに二千年の昔に亡びて、今や空しき廢墟と化し、將來の世界秩序建設に何等の貢献をもなし得ぬ現狀である。それは、キリストの悲願もソクラテスの願望も共に、その現實社會生活の上に直接實現を見なかつたがためであり、祖國と共に無窮なるべき彼等の志は、祖國が亡び去つたことによつて悲しくも斷絶せしめられねばならなかつたのである。

しからば祭政一致とは何か。その本質を我々は先づ固有日本語の中から汲み取らう。日本に於ては政治とはマツリゴトである。マツリゴトは同時に神を祭る宗教的祭事を意味する。人類社會に於てはもと〳〵政治と宗教との分離はなかつた。否社會生活の發展と共に兩者が完全なる分裂に陷つたのが、諸外國の歴史であるが、それを常に統一發展せしめたのが日本の祭政一致の國體である。古言に「大君にまつらふ」とある「まつらふ」はマツルと同義で、日本臣民は　天皇に對し奉り所謂臣從するのみではなく、天皇を現人神として禮拜するのである。天皇は又國民を統治せられつゝ、否統治の根本として御歴代御祖先の神靈を同樣に禮拜せられるのである。玆に國家生活を一貫するところの祭政一致の原理が窺はれる。

前述の如き、人類普遍の念願としての君主（統治者）と神との內的一體化、即ち、現實の君主（統治者）に歸一することがそのまゝ神に歸依することゝなるといふ、理想社會を實現せんとする念願は、玆に現しく日本の國體の精華に、又日本の國體の中にのみ具現せられて來たのである。北畠親房が「神國日本」と云つたのはこの事實の統一集中的表現である。この限りに於て所謂普遍的國家概念の中に、日本を加へて考へることは大いに慎しまねばならぬ。それは決して獨善乃至無內容の誇負を意味せず人類の共通理念の實現を、即ち、人類社會の眞の向上發展を眞劍に求むる者の、必然的に歸着すべき學術的結論である。

學問とは現實の究明である。山鹿素行はそれを格物致知と云つた。日本の國民生活の現實といふのは根本的には以上述べた如き國體の事實である。それならば學問及びその研究者たる學者の依據すべき原理は、この國體事實を措いて他にはなく、この國體事實を更に正確に究明してゆくことが學問の任務でなければならない。かくて日本人としての我々が行ひ得る學問とは、日本を主體としてその國民的信念に立脚しつゝ、人類文化の全領域に亘つて綜合的體驗的に探究せられるべきもの

である。自然科學・精神科學の學的性質の相違は、この生命の根源的事實の前に於ける限り、研究者に取つては何等重要の問題とならない。即ち自然科學者と雖も、人生觀的問題に迄、學問に國境なしなどといふことを前提して研究に從事するならば、それは、研究者自身の國民的信念をして曖昧ならしむる危險を藏し、その結果はその研究成果をも減殺するに至ることを反省しなければならない。

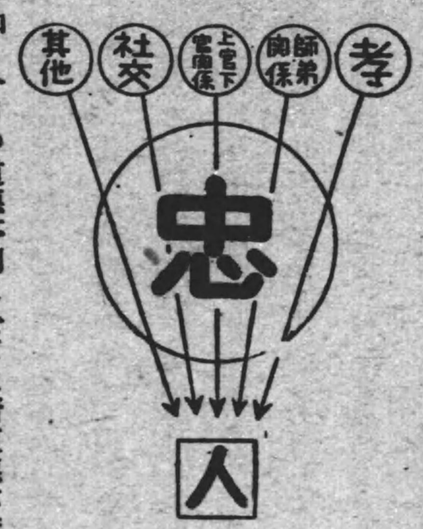
（自然科學と精神科學の研究方法の根本的相違については、之が重大意義に鑑み本叢書第三輯に於て詳細に論及する。）

三、諸道德序列の改更

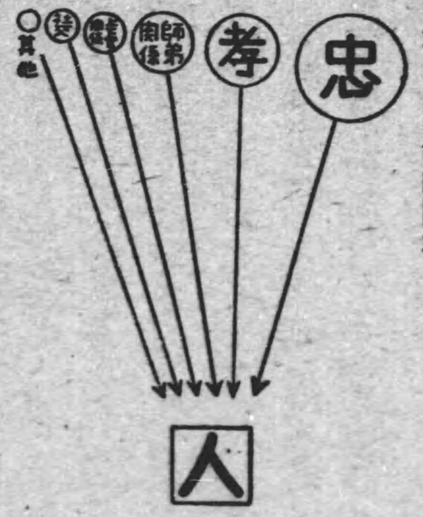
今日學校で我々が學ぶところの諸道德 ——忠、孝、博愛、正義、師弟の禮、公德、友情 ——はそれら相互がいかなる序列に於て並べられてをるか、全く曖昧のまゝにされてゐる。人間は一つの行動をとる際に、二つの基準に則ることはできぬのであつて、諸道德が同時に要請せらるゝとしても、それらが一つの線に秩序よく整備せられてをらぬ限り、それらの諸道德に忠實に生活してゆくことは不可能となるのである。それ故社會生活に於ては社會道德が要請せられ、學校生活に於ては師弟の禮が、亦家庭生活に於ては孝が、そして國家生活に於ては忠が要請せらるゝといふだけの說明では、我々の日常生活を統一的に實現してゆくことはできぬ。何故ならば現實の社會も現實の學校教育も時には家庭生活ですら、國家生活の鏡に照して反省する時極めて不完全であり、悲しきことには國體の信を冒瀆するが如き雰圍氣がそれらの中に釀しだされてゐることさへありうるのである。大學の反國體學風の下に學ぶ學生、立身出世を頑冥に要求する家庭に於ける子供、民主主義思想を絕對とする村會・市會その他の公共團體に生活する吏員役員、又國家目的を無視して自己の營

利のみを追求する大會社に勤める社員、これらの人達が現實生活に於ては、右に述べた如きことが切實に體驗せられつゝあるのである。これらの人々の生活にその遵守しうる諸道德をそれ〴〵矛盾なく與へんとするならば、玆に新しく日本の國體並びに歷史に則りたる日本獨特の道德序列を我々の日常生活に則して、明示することが必要となつて來る。今是を左に概略圖示しよう。

正しき道德の序列



今日の道德序列



右圖の如く今日の道德序列に於ては諸道德が横に並列され、隨つて個人は一つの行動に際して同時に一樣に諸道德の實現を要請せられる。而もそれらが相互に並列されてゐるのみであるからその間に輕重をつけることが極めて困難となり、その爲に、その行動の直接關係する團體生活の道德がこれらの中で最も重要な道德なるかの如くに考へさせられて了ふ。卽ち學生生活に於ては師の思想が反國體であるとしても師弟道が成立せざれば忠は成立せずと敎へ、社會生活に於てはその社會道德の內容を一應問題外として、社會道德に反するが如きことでは忠は實現できぬといひ、又國家の逼迫せる現狀を理解せぬ家庭に於ては親のいふ事を聽いて立身出世に努力せざる者は忠を爲すことができぬといふ樣な道德序列の本末顚倒に類するが如き言動が極めて當然の如くなされ、なんらの疑も挾まれずに認められてゐる現狀を招來してしまつてゐる。尤も諸道德が並列されてゐるといつても圖に示した如く「忠」は大きな地位を占めそれに「孝」が次ぎ、他の道德がそれらに次いで適當の大きさを占めてゐるのであるから、その間に自ら輕重があり隨つて諸道德の要請が衝突するときは適宜に取捨選擇せらるべき規準は一應整備されてをるかの如くに見える。然しそれが實際の生活に於て殆んどなんらの威嚴をもたず徒らに當事者の判斷を迷はすにのみ役立つてゐるといふことは今日の社會生活事實の示すところであつて、我々はそれがいかに虛妄の序列であり、人間生活に堪へられざる諸道德の配列であるかといふことを看破しなければならない。

眞の道德序列に於ては圖に明らかなる如く諸道德が成立する爲には忠の範疇に包含されることを

根本條件とし、忠の立場から檢討せられて始めて、諸道德の內容が完全に規定せられうるに至る。即ちそこでは師弟道に則ることによつて始めて忠になり、孝を果すことによつて始めて忠になる。といふが如き說明は一應結果から見ては是認されるとしても、それらの道德の成立の過程から見れば全く許されぬことが明らかとなり、忠であつて始めて師弟道が成立し、忠であつて始めて孝が成立しうるといふことが闡明せられるのである。故に存在しうる道德はたゞ一つ、忠のみであるといつて差支ないのである。忠の諸道德に於ける地位は日本國家の諸外國に於ける地位が、日本國家の本質に鑑み、單なる普遍的國家概念を以てしては律しえざると同じく、常識的一般概念による道德の一つとして考へてはならぬ。それは超道德であり、我々の生活を道德的に統一せしめうる唯一の基準である。それ故凡ての他の諸道德は、直接忠との關聯を考へればよいのであつて、諸道德間の卽ち孝と師弟道、交友關係と師弟道、社會道德と孝といふ樣な關係に就ては一應之を不問に附し去つてもなんら差支ないことゝなり、我々の日常生活に於ける道德觀念も極めて明確なるものとなり、我々はそれ故に不必要な煩悶から開放せられ、國民生活は自ら活氣を帶びて生き生きと力づよく蘇つてくるのである。

四、「人格の陶冶」と「國家思想の涵養」

小學校令第一條を見ると

「小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及ビ國民教育ノ基礎幷ビニソノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」

大學令第一條を見ると

「大學ハ國家ニ樞要ナル學術ノ理論及ビ應用ヲ教授シ幷ビニソノ蘊奧ヲ考究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及ビ國家思想ノ涵養ニ留意スベキモノトス」

右の如く「道德教育」と「國民教育」とを別箇の概念として考へ、「人格の陶冶」と「國家思想の涵養」とを並列して考へるのが今日の吾國教育の小學校より大學に至るまでの一貫せる見解となつてゐる。「道德教育」「人格の陶冶」といふ言葉が意味してゐるところのものと、「國民教育」「國家思想の涵養」といふ言葉が意味してゐるものとは、いかなる內的關聯を以て連結せしめられてをるか。その關聯の實相を明らかにする事こそ、次代の國民を教育薫陶する上に於て、第一に重要視

せらるべき問題である。右に引用せる小學校令より大學令に至る學校令の第一條に明らかなる如く、その關聯を明示せぬ所の教育方針が、實に今日の學校教育につきまとふ諸々の思想的混亂の根本原因をなしてゐるのである。

今このことに就て詳細に檢討して見る。天皇、國家に對する觀念は一應教育されてをるが故に、又日本人の生れながらの心情の然らしむるところによつて、あらゆる日本國民は天皇に對しまつる忠誠心を持つてをるといふことができる。然し學問研究がその忠誠心に統一せしめられてゐない爲に、自分は忠誠の志に燃えて生活してゐる積りでをりながら、實はとてつもない反國體思想を信奉したり、天皇の尊嚴を汚しまつるが如き主義學說に眩惑せしめられたりしてしまふのである。此の人たちは他人からその思想を批判せられて、「君の思想は不忠である」といはれると、全く心外だといはん許りに「私は心から大君に仕へまつらうと努力してゐる。陛下の同じ赤子たる日本人に對して輕々とかゝる暴言を吐く者こそ不忠ではないか」と眞向から反問して來るのである。天皇機關說が問題になつた際、貴族院でなした美濃部博士の言說が之であり、又自由主義の河合榮治郎氏、世界法理論の田中耕太郎氏の如きは何れもこの例に洩れぬ人々である。

この人達は――一般に今日のインテリゲンチヤも同じであるが――忠義といふことに就て一つの大きな錯覺に陷つてゐる。それは不忠といはれて激怒するだけの、天皇に對しまつる臣民感情は持つてをるのであるから、その人々が忠義を少しも考へてゐないといつて非難するのではないが、その人々の言說――それはその人々の人生體驗、生活意志の不隨意の表白であるが――は、忠義を積極的に說くのでなく、不忠といはれて始めて「さうでない」と消極的に辯明するだけであるところが、客觀的にいつて忠義そのものがその人々の實生活を指導する根本的原理とはなつてをらぬ證據であるといふことができる。之は學問と國民精神とを分離して考へ「道德教育」「人格の陶冶」と「國民教育」「國家思想の涵養」とを並列して考へ、それ故に兩者を上下秩序なく把握したところの、誤れる教育方針のいたましき結果である。

普通に一般道德として禮儀とか正義とか博愛とかゞ擧げられ、それが一國民に適用された時、國民性の相違などに制約されてその一國にのみ妥當する「國民道德」が生れ、日本に於てはその最も顯著にして他に比類を見ぬものとして「忠義」道德が擧げられてゐる。而もその「忠」たるや何か、我々の日常生活を遠く離れた、或ひは國家の存立が危殆に瀕した戰爭の樣な非常時にのみ要求され

るところの道德であつて、差し當つて今日の社會生活を營む上には大して必要を感じない。いはゞ忠とは抽象的な現實生活とは緣遠い、そしてあからさまに云ふことを憚る樣な言葉として通用してゐるのが普通である。然し乍ら忠とは果してその樣な抽象的な道德であるであらうか。

五、忠の內容は具體的なり

忠とは普通抽象的な國民道德の概念として考へられてをるが、實は日本國體が具體的の內容を以て存立してゐると同じく忠も亦歷史的制約を持つ一つの具體的內容を持つてをる。卽ち　天皇に仕へまつるといふことは　天皇に仕へまつらむとする觀念的意欲のみによつては果されぬのであつて、全人格的に卽ちその人の觀念意志行動の凡てが、歷史的內容を持つところの具體的忠の內容に照してみて忠といひ得て、始めて正しく　天皇に仕へてをるといひうるのである。

忠の內容に歷史的具體的制約があるといふことは先づ第一に、仕へる對象　天皇が歷史的に特異な本質を有し、それ故仕へるといふこと自身がその對象の本質の把握を忽せにしては到底達成できぬといふ點にある。　天皇の大み心は、具體的なものであり、その具體的な大み心に素直に仕へる爲には、自ら具體的な心構へが要請せられてくる。隨つて大み心をありのまゝに仰ぎ學ぶことをぬきにして忠を云爲し忠の成立を豫想することは根本的に誤であるといはねばならぬ。

忠の歷史的制約の第二は、祖先が一身一命を賭してみ國を護り來たつた一貫せる心情の內容によ

つて明示せられてゐるといはねばならぬ。　天皇に一すぢに仕へまつらむとして努力した祖先の全人格的生活は、常に「「背私向公」といふ根本命題を全人格的に即ちその人々の觀念意志行動凡てを捧げて實現せんと努力した點に於て全く一つであり、それ故にその間につらなる心情の內容は、客觀性具體性をもつてゐると言ひ得るのである。

斯くて我々が我々自身の行動を忠ならしめんと志すに際しては、一つには大み心のいかなるものかといふ事を、大みことばに就て直接文献的に學んでゆかなくてはならぬ——玆に後記する如き明治天皇御製拜誦と禮拜實修の意義がある——と同時に、その大み心に素直に隨順せんとして一生を貫き通したところの祖先の遺文等に、それらの祖先の苦鬪し續けた人間生活のありのまゝの姿を偲び——玆に後記する如き、古典研究の意義とその研究方法論が生れて來る——この人生に忠の志を貫徹してゆく具體的の道しるべを求めてゆかねばならぬ。この行き方こそ日本國體に一貫明示せられ來つた忠の客觀的內容を最も正確に把握しうる唯一の道であるが、玆に注意すべきはこの方法によつて學ぶ人の學び方即ち大み心を偲ぶに際しての心構へ、祖先の遺文古典を讀むに際しての心構へ等が最も重要な問題となつて來るのであるが、之は新しき學生生活を建設せんとする我々にとつて最も切實なる問題であり、最も忽せにできぬ問題でなければならぬ。故に次にこの目的を實現し得る生活として考へられる所の所謂同信生活の具體的生活態度を解說してゆきたいと思ふ。

六、「個人々格の完成を目指す修養」と「全體沒入生活による修錬」との相違

今日の學校教育の目標は、抽象的には、忠良なる日本臣民を養成することに置かれてゐるが、具體的には「個人々格の完成」とか「自己修養」とか云ふ點に置かれてゐる。即ち、個人々格を完成するといふことが、忠良な日本臣民になることの前提となつてをり、自己修養個人修養を深めてゆくことが、とりもなほさず忠臣となり得る道である、といふ風に理解されてゐる。前の項で眞正の道德序列に就いて述べた時に、忠とは決して抽象的な道德概念ではなく、その內容は歷史的制約を持つた具體的のものであることを力說したが、こゝではこの事を別の方面から明かにしてゆかうと思ふ。即ち前には忠の方が師弟道とか孝道とか社會道德といふものよりも一層具體的內容を有し我々の身に切實なものとして要請せられるものであり、後者の方が一層抽象的概念に止まるものであると云つたのであるが、こゝでは「自己修養」といふことゝ、「忠の心を養成する」といふことゝに就いて之を考へて見ると、一般の通念とは正反對に、忠の心を養成する事の方が一層具體的修錬を意味し自己修養するといふことの方が、一層抽象的修錬に過ぎないといふ事を明かにしたいと思ふ。

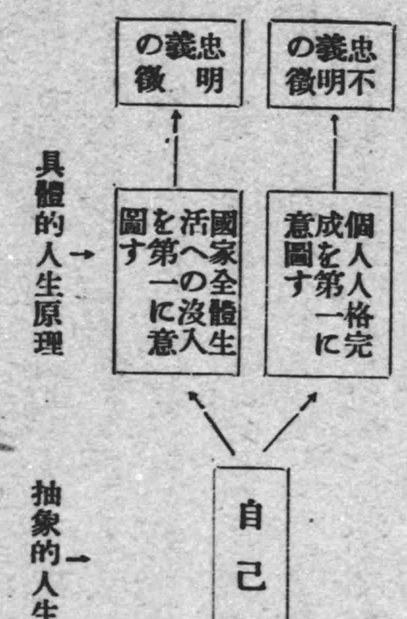
しかしそれを論證する前に玆で是非とも一言しておかねばならぬことは、「個人々格の完成を目ざす」といふことが、果して人生の求道精進の姿を正しく把握した表現であるかどうかといふことである。人間は心を謙虛にし、自己の缺陷に對して素直に反省の眼を向けて行けばゆく程、即ち所謂修行を積んでゆけばゆく程、如何に自己が足らはぬものであり、不完全な人格しか有してをらぬかといふことに目覺める。はじめのうちは、個人々格の完成した姿を心に描き、それを一つの理想的形態とし到達目標として修錬を積んでゆくが、その理想點や到達點は、修錬をつめばつむほど、所謂人格の完成を意圖して努力すればする程、益々はろけき彼方に遠ざかりゆくのみである。かく考へて來ると、個人々格の完成を目指して努力するといふ云ひ方は、實人生の正しき姿の一つの虛妄的映像を見て、それをそのまゝ人生求道の眞の姿なりと思ひこんでしまつた所の考へ方から出たものである。即ち人生求道の大道に於て永遠に變らざる精進目標となるべきものは、決して個人々格の完成を意圖することではなくして、人間の不完全性に如何に深く徹し得るか、といふ所に存してゐるのである。之を換言すれば、眞に共に之れ凡夫としての痛感に正しく徹し得る者こそ人生求

道の精進者であり、その人は自己の體驗を正しく反省し回顧する限り、個人々格の完成を努力して來たのだとは告白し得ない心情に置かれてゐるのである。

しかし人は或は云ふかも知れない「すべての人々は自分をえらいと思ひこんでゐる、それなのにその人は人間が如何に不完全であり凡夫であるかといふことを痛感してゐるのだから、結局、その人こそ人格が一層完全に近づいてゐると云ふべきではないか。何も、個人々格の完成は虚妄であり凡夫感への徹透が正しい把握であるなどといはなくてもよいではないか。兩者は結局同じことを云つてゐるのであるから。」と。かく考へるのが今日のインテリーゲンチヤの通弊である。なぜならばこの言葉の中には一つの大きな誤謬が祕められてゐるからである。それは、かゝる人生求道の姿を第三者的に、傍觀者的立場から眺める觀察と、人生求道の姿そのもの〻内面的過程と推移を凝視して、それに自己の體驗を關聯せしめてなす觀察とを、全く混同してしまひ、その二つの觀察から出て來る相違が、その觀察の仕方、方法の根本的相違に起因してゐるのに氣づかず、たゞ一つの事柄に對する單なる二面からの觀察の相違にすぎぬと考へてしまつてゐる事である。即ち本質的に根本的に相違する二つの研究方法の相違を、研究方法そのものは相違せずして單にその對象として取上げる部分が違つてゐるだけだと至極簡單に片づけてしまつてゐるのである。

人間の體驗や、求道のことについて語り合ふ時でも、これらの人は單に、人間が立派になつてゆく外面的姿を見て、之を個人々格が完成してゆきつゝあるのだと云ひ――そこまでは正しいのであるが――それをそのまゝ人生原理として考へてしまひ、我々が求道するに際しても個人々格の完成を目指してゆけばそれでよいのであると云つてしまふのである。人生原理はあくまでも人間の心が主體であるから體驗する人の内容的立場こそ第一に大切であり、それ故に、人生を外から見た姿を、そのまゝ人生原理として持つて來てしまふことは最も慎まねばならぬことなのである。繰り返して云ふ様であるが、前記せるごとき眞摯なる人生求道を指して之を個人々格の完成への過程にありと表現することは、あくまでも傍觀者的第三者的立場よりの觀察であり、それ故その云ひ方は、人生の體驗そのものではなく、從つて人生求道の姿の内容的把握ではないのである。我々が人生の問題を論じ、人生觀の内容を檢討し合ふ時には、常に外面的觀察と體驗の告白とを同一並列的に混同してしまつてはならぬことを特に銘記しなければならない。なぜならば今日の學校教育と云ひ社會の物の見方といひすべてこの虚妄に陥らされてゐるからである。

（第三者的立場に立つて物を見ることが所謂自然科學的研究方法による見方であり、體驗そのものゝ中に自己を沒せしめてその問題を論議すること、即ち觀察主體と離れない所の對象を研究するといふことが精神科學の研究方法である。この事に就いては學生生活叢書第二輯に於て詳論を展開するが、要するに人生問題とか社會問題とかいふ精神科學の分野に屬する問題に對して、常に第三者的傍觀者的態度に終始して自然科學的見方で見てゐたのが、今日の知識人全般の大きな誤謬であることを知らねばならない。物の見方に根本的に誤りがあつたればこそ、色々の邪惡思想に迷はされてしまひそれに對する正しい批判能力を失つてしまつたのである）



さて些か横道にそれてしまつたが、「忠の心を養成せんと努力する」ことの方が「個人々格を完成せしめんと努力する」ことより一層具體的人生原理であり指針であるといふことに論及しよう。

右圖に之を略示したつもりであるが、我々は抽象的人生目標として自己修養といふことを考へることは出來るが、具體的人生原理としては、國家全體生活への沒入即ち、歴史的內容を持つた忠の修錬を意圖しなければならぬ。乍然抽象的人生目標としての「自己修養」に何等の具體的內容を附加せしめずに、そのまゝ具體的人生原理としてそれを掲げてしまふならば、即ち具體的人生原理としてあくまでも自己修養を樹て、個人々格完成を固執してゆくとするならば、それは既に全體沒入生活と或意味に於て對立し、或意味に於て相容れ得ない生活態度となつてしまふのである。國民が一つ心にむすび合ひ祖先の祖國守護の情意生活をこの現世に受けつぎゆかんとする所に第一の志を置く者は、その全體生活、國家生命に歸入し沒入する所に、自己の修養の意義を見出すのであるから、人生原理としては國體の信への歸入、同信同胞生活への沒入をこそ考へざるを得ないのである。

然るに個人の人格が完成されてゆくならば、結局さういふことも可能であるといふ、一つの空想

的假定の上に立つて個人々格の完成に努力するといふのであるならば、それは不可能なことを祈求してゐるに他ならないのである。なぜならば、もしこの世に個人々格の完成に近づくといふことが有りうるならば、それは個人を顧ずして全體生活に沒入しようと全身心的に努力しつゝある人に就いてのみ云はれることであるからである。己の力、人間の力のはかなさに徹すればこそ、全體協力生活への歸入の願望が苦しくなるのであつて、それを「我々は足らはぬものであるが故に、個人人格の完成に努力しなければならない。全體を考へるにしても、先づその個人個人がよくならなければならないではないか」と、いかにも尤もらしい事を云つて全體生活の意義を理解せぬ人達は、要するに「人間は足らはぬものである」といひつゝ、それが完成され得ることを豫想して生活してゐるのであるから、自己の力を信ずること極めて厚く、人間人格の偉大性に信倚する志極めて深い人と云はねばならぬ。要するに個人主義者であり自己神化教者であり、結局口では云ひつゝも「人間は足らはぬものであり、凡夫である」といふ言葉の眞意を解せぬ增上慢思想の持主である。

かくて思想生活上の嚴正なる立場から見るならば、「自己修養」といふことは抽象的な人生の行き方を表示したものであり、之に對して「全體沒入」「忠の實踐」「大君の御爲には如何にしたら生き

得るか」といふ問題は、その抽象的な行き方の中の、具體的人生原理、實人生に立脚せる生きた人生原理となりうるものである。そして抽象的人生目標たる「自己修養」をそのまゝ具體的人生原理におしすゝめて「個人人格の完成」を原理とするならば、その內容は依然として抽象的のまゝであり、空漠概念そのまゝであるが故に、かゝる抽象的空漠概念をそのまゝ人生原理とすることによつて、その人の思想生活は全く混亂に墮し、そのため結局正しい唯一の國體原理に則つて萬事を批判し把握する能力を失ひ、その擧句自己の時々の心境、浮動的思想によつて事物を判斷批判せねばならなくなつて來るのである。かくて前述指摘せる如き美濃部博士、河合榮治郎氏、田中耕太郎氏の如き諸々の學者達が陷つてゐる一つの大きな錯覺が實現されて來るのである。——主觀的氣持に於ては全く忠道を正しく踏んでゐると思ひつゝ、途徹もない反國體思想の宣說者と墮してしまつた如き。

七、現代高等專門學校生活の缺陷とそれに對する自彊的方策としての同信生活

今日の學校教育に於ては衆知の如く、各學科はその間に殆ど何等の連絡もなく無關係に教授せられてゐる。例へば高等學校を例としてみても、一時間目に英語をやれば二時間目には國語をやるといふ樣に次々に割り當てられ乍ら內容的には少しも統一がなく、況んやそれらが學生の人生觀確立に役立つ如く教授せられぬ爲、學生の方は各自の體驗に立脚して、諸學科の知識を批判攝取し、それらを統一された生きた知識として吸收して、自己の人生觀確立に役立たせるより外はない。高等學校生活に於て第一に要求されるところのこの、人生觀確立といふ事は、例へば寄宿寮のやうな共同生活の行はれてゐるところに於ては、教室の斷片的知識を僅かに生かしうる廣い體驗も與へられるのであるが、それすらない高等學校に於ては、勉强は全く中學校に於ける受動的態度のそのまゝの延長に過ぎず、專門的な知識の擴大はあつても人生體驗といふものは遂に與へらるべくもない。大學入學試驗を通つて更に些末な專門分科の領域に盲目的に導入さるゝに至れば、その人は遂に十數年の學校生活を全く他動的に無自覺の中に空費し、加之社會に出て後は、今日屢々非難されるところの、いはゆる學校出の實際生活に對する無知無能に墮すること火をみるよりも明らかである。

そこで問題は、現行教育過程中の特に重要な段階としての高等教育、卽ち高等學校、專門學校の生徒をして、生涯を一貫する如き切實の體驗を與へ、それによつて教室における諸知識を綜合統一せしむることが必要である。高等學校の學校規定によれば諸學科擔任教授は豫め緊密な連絡をとつて常に統一した知識を與へるやう、規定されてゐるのであるが、事實は殆ど之が行はれず、生徒は、青年本來の欲求からして、この斷片的知識の缺陷を補ふものとしてさま〳〵の自發的研究團體をもつに至つた。比較的學術的のものとしては國文學會、哲學會、史學會、自然科學研究會、純趣味的なるものとしては映畫會、觀劇會、俳句會、短歌會、運動團體としては、野球部、劍道部等々がある。然しこれらは、教室に於ける知識に若干の色をつける程度のものであるか、或は肉體の鍛錬を通しての所謂スポーツ精神の養成といふ程度であつて、生徒の要求が更に高まれば、こゝに精神團體、思想團體を生み出す。例へば佛教青年會、キリスト教青年會、禪の會の如きものである。それらは、より深く生命の自覺、體驗の究明へと志すものゝ集りであるといつてよい。乍然、それら思想、

宗教團體もなほ自己修養の域を脱せず、過去の狀態を省れば多く國家生活の現狀から逃避し、或は政治生活の意義を輕視するが如き、結果に於て反國家的の傾向に陷つてをつたことが屢々である。

以上の如き現代の學校生活に於ける諸補助機關の缺陷を更に充實して眞の協力生活の實を揚げ、日本國民として根本の人生觀を確立せんとするものが所謂同信生活である。

同信生活とは信を同じうするものらのゆるぎなき協力生活を云ふ。信とは通俗的には信仰と云ひ信念といつても差支へないが、要するに宏遠なる日本國體の精華に對する信である。それは他項に於て詳述するが、明治天皇御製を教典とする國民宗教としてのしきしまの道の實踐躬行をいふのである。その意味に於て同信生活とは、本來億兆一心たるべき日本國民生活そのものを云ふのであるが、歴史に明らかなる如く、われ〳〵國民は陛下の大稜威の下に無量無壽の皇恩を蒙りながら、やゝもすれば臣民の行くべき本來の道より迷ひ出でんとする、こゝにこの迷を不斷に正して、本來の臣民道に歸せしめんと切磋努力するのが同信生活である。

學生の使命は學問の研究にある。しかしながら本書を通じて明かなる如く、正しき學問は國體の信を不斷に新たにしつゝ始めて建設しうるものであるならば、同信生活こそは正に學問探究に於ける最も根源的なる基礎でなければならない。

新しき學術思想體系を確立し、動亂の世界情勢に處してゆるぎなき指導解決の任に耐ふべき學生こそは、正にかゝる同信生活を通して始めて生み出ださるゝのである。

同信生活に於ける學術研究は、今日の學界に於て最も憂ふべき專門分科割據の弊を正して、一貫せる原理と研究方法とに立脚せる複雜にして同時に簡明統一ある學術體系を建設せんとする。何が故に專門分科の弊は起つたのであるか。それは近代文明發展の必然的成行ではあるが、根本的に云へば研究者の內心に味はるゝところの眞の共感世界が失はれた爲であるといふのほかはない。それを回復し自覺することこそ二十世紀學術改革の先決豫件である。そこに始めて人類文化を正しく開導するところの綜合的學術の威力が現はるゝのである。同信生活に於ける各人は日本國民生活といふ偉大な共感世界に立つて、深く專門の領域に分け入るのであるから、その際に於ける複雜多彩は分裂を來さずして、反つてます〳〵綜合的の威力を發揮する。かゝる綜合的學術研究こそ近代文化をその解體から救濟するところの唯一の方途である。同信生活とはかゝる人類史的使命を負ふ學術研究團體でなければならないのである。

八、同信生活に於ける禮拜實修の意義

イ、禮拜實修について

同信生活を實際につゞける上に於ては、神を祭り禮拜の實修を行ふ。神に眞心をさゝげ大君に仕へまつらんとする志は、それが禮拜實修の形にまで表はされて磨かれてゆく時、はじめて素直な成長をつゞけてゆくのである。

禮拜の意義を説明するに先立ち、今全國の若き學徒が朝夕に行ひつゝある禮拜實修の方法を一應紹介しておかう。禮拜は二拜二拍手して

祝詞

「みたみわれら
もろともに
まめやかに
わが大君につかへまつらむと

誓ひまつらむ」

を二回唱し、二拍手一拜。次いで明治天皇御製を數首拜誦、拜誦を終つて後、再び二拜二拍手、祝詞二回、二拍手一拜といふ方法である。同信生活は、全國民が一つ心に大君につかへまつることを志すものであるから、多人數でもろ共に之を行ふことが望ましいが、一人で行つても心は一つに通ひ合つてゆくのである。

明治天皇が

寄國祝

かしの實のひとつ心に萬民まもるがうれし葦原のくに

と詠ませ給うた大御心は、まさしく同信生活をつとめはげむ臣民の微衷を長くもみそなはせ給うたものと拜察せしめられる。

我々の日常生活には色々の禮儀が行はれてゐる。人と會へば挨拶をなし、無禮なことをすれば謝罪する。有難いと思へば、謝意を口に表はし態度にあらはす。之は我々がそれと氣づかずに行つて

ゐる所の一つの形式であり儀禮である。心に有難いと思ひ、謝罪したいと思つてゐるだけでは、それは相手に通じ難い。それがつきつめたおもひとなつて來れば、どうしても形にあらはし態度にあらはして相手に通ぜしめようとする意欲にかられて來るのである。

神に對してもこれは同じ事である。よく今日の學生が云ふ言葉の中に「自分等は日本の神々を心から有難く思つてゐる。　天皇の有難さも誰にも劣らぬだけ感じてゐる。だから何も神社に一々參拜にゆかねばならぬとか、御製を拜誦せねばならぬとか云ふことは、絶對的に必要なことではない日本人が生れながらに持つて來てゐるものを、それらによつて養つてゆかねばならぬかの如くに考へる方がよほど不自然である」と。

この言葉は、心から大君に仕へようと日々全心身的に努力してゐる人の云ひうる言葉ではない。それは人生の體驗を拔きにした抽象論である。他人から恩惠を受けた時に、自分はそれを有難く思つてゐるのだから、有難うといはねばならぬ必要はないと、若し考へるならば、さう考へる事自體が、その相手に傳へるべき「有難さ」の感謝の心を、すつかり滅殺してしまつてゐることを氣づかぬのであらうか。感謝とか、心をつくすとか、身をさゝげるとかいふことは人間の全情意的行動であつて、決して程度の差を自分自身で調整することは出來ない事柄である。この程度でとゞめようといふことが即ち、有難さを全心身的に感じてゐないことの不隨意の告白となつてゐるのである。

大君に對する赤誠があるならば、又神を憶ふ誠心で生きんとしてゐるといふならば、神に禮拜し大君のみことばをかしこみかしこみ拜誦するといふことは、日常生活に於ける諸禮儀と同じく、きはめて自然なことであり、心に思ふことが他につらなつてゆく道がそこにひらけ、それは又心におもふことを一層具體的に又一層擴充して實現してゆく道ともなつてゆくのである。更に事禮拜に關しては、日常生活に於ける諸禮儀とは異り、一層深奥の精神的內容、宗教的雰圍氣を持つものであるが故に、それを行ふと行はざるとは、單に心におもつてゐるにとゞめることゝ、それを表現して客觀的のものたらしめるとの相異にとゞまるのではなく、實際に行はされば自分自身に於てすら正確にその心持を感得出來ないのであるから、禮拜實修に對する逡巡心は、卽ち、忠義感情そのものの輕重として考へられても仕方がないのである。そして忠義感情には厚淺あることなく、「足らぬ忠」は常に不斷に「不忠」の範疇に屬することだと思ふことが、忠義感情を正してゆく臣民自身の主觀的體驗であるから、禮拜の實修を行ひつゝ、神につかへる道を一層あきらかに求め、大君の

みことのりを拜誦しつゝ　大君の大御心のありのまゝの姿を偲びまつり、以てその心を一層具體的に忠の道に進ませてゆかんとするのが、臣民としてのやむにやまれぬ志となつてくるのである。

前に觸れた如く「大君にまめやかに仕へまつる」といふことの意義は單に政治的君主として尊敬する例へばイギリス王室の如く「君臨すれども統治せず」といふやうな謂はゞ形式的權威に止まるのではなくして、臣民が全身心を献げて仕へまつるといふ宗教的歸依禮拜でなければならない。

從來、皇室中心主義といふやうな言葉を以てこの君臣關係を表現しようとしたのは國民としての歸依感情の眞率を疑はしむるものがある。その樣な考へ方は、要するに幕末多事の際に於て江戸の政治的中心と京都の宗教的中心との對立が、日本政治の混亂の原因であるといふ、云はゞ外から眺めた外國外交官等の皮相淺薄な第三者的觀方に引きづられものである。それは幕府中心主義に對し、皇室中心主義を唱へたものであつて、祭政一致の日本固有の政治原理からすれば明かに誤れる見解であり、一君萬民の政治的秩序は　現人神禮拜の宗教的情操によつて支持されてゐることに想到せねばならない。

前述したところであるが、機關説を説いた美濃部達吉博士が「天皇に對する尊敬の氣持に於ては人後に墮ちない」と云つた如きは、明らかに　陛下に對する日本國民の忠義意志を、前述せる如き政治的皇室中心主義として感受せる誤謬の一例である。又、或る學者は日本を『神主國家』と誹謗したけれども、それは「祈る」といふ謙虚な氣持を忘れ果てゝ、理知を至上として概念的に一切を解決しようとする、理性迷信から生れた言葉であり、それは必然的に自己神化教（ヘカストタイスムス）に墮るのである。日本人は神代からイノルといふ事を不斷に實修して來た國民である。例へば『青人草』といふ言葉に表現せられてゐる如く、國民は　大君の下にひとしく民草として忠誠を盡し、玆に日本國家の世界に比類なき精神的結合を實現したのである。

神に祈るといふその神とは護國の神靈であつて、祖國の生命を悠久の昔より永劫の未來に亙つて護持するところの御歴代の神々又天神地祇である。神に祈るとき我等のはかなき個體生命は無窮の史的永久生命に攝取せられ、生きしめられ、こゝに天上の極樂を內心の解脱として現實的に體驗することが出來るのである。神人交通とはこの人のまことが神に通ずることであつて、古人が神國日本と云へるもむべなるかなと思はしめらるゝのである。今や、今次事變に戰歿せる皇軍將士の英靈

は護國の神として祭られて居る。靖國神社に參拜する國民の姿はさながら『神國日本』のコトバを偲ばしむる劇詩ではないだらうか。

四、明治天皇御製拜誦について

我々は次に　明治天皇御製拜誦の意義を說かねばならない。

天皇を禮拜し忠誠を靈さんが爲には、念々に大御心を拜察しつゝゆかねばならぬ。大御心は公には詔勅として國民全體の行くべき道を照示せさせ給ふと同時に、　天皇としての御人生觀の表現として國民精神を導かせ給ふものとして垂示せられたものは實に御製である。

御製は日本古來より、一貫せる國民藝術しきしまの道を敎導せさせ給ふものであつて、同じく三十一文字の簡素なる表現形式に依つて、畏くも　天皇は國民と共に御歌を詠ませ給ふのである。例年新春の御歌御會の如き君臣唱和の盛儀が今日も尙傳統してゐるといふことは、言靈の幸はふ國日本にして始めてありうる事である。

かくて「御製は拜誦するも畏れ多い」といつて敬遠すべくもなく、常住坐臥之を拜誦することに

斷に　大御心に副ひまつらんとするのが同信生活の第一義諦である。　不

古人が出征に當つて、「大君のみことかしこみ云々」と詠んだその「みこと」とは　天皇の大みことばであり、それの最も藝術的なる表現が御製であることを思ふならば、御製拜誦といふことは古今を通じて渝らぬ國民の臣道實踐第一義たることに氣付かねばならない。

月前霧

大空はさやかに見えてさぎりたつ水のうへくらし秋のよの月

この御製を拜すると、無限の宇宙に融け入る生命の律動を感ぜしめられる。生命の律動さながらにひゞかしめ給ふ大御歌のしらべは、又、

月前遠情

もろこしの荒野の末のありさまを思ひやりても月をみるかな

の御製に於て新たなるしらべを我らの心に湧き立たしめる。月に對して宇宙の無限さを大御心に偲ばしめられるとともに、その大御心は遠く戰場にみくにをまもりつゝ戰ふ臣の上に馳せたまふのである。そして又その大御心は

神祇

わがこゝろおよばぬ國のはてまでもよるひる神は守りますらむ

と、みくにを永遠にまもりゆく神の心に通はせたまふのである。神は　大君の御祖先であり、又大君の御祖先につかへまつゝた臣の神靈でもあることを、大御心の內に一つの姿としてみそなはせられる。

秋風滿野

遠山の雲も動きて秋の野のちはやかやはら風わたるなり

秋海

しま〳〵もさやかに見えてかゞみなす靑海原に秋の風ふく

この御製は單に景色をお詠みになつたばかりでなく、生きとし生けるものに大御心を通はせたまうたことが窺はれる。これは知覺の詩ではなく、動きつゝあるものゝ、そのまゝの把握である。我々の精神は常に小さく狹く、個人的のものに躊躇し勝ちである。しかし御製を、ことにこのやうな御製を拜誦しまつると、その樣な我々の心も、いつしか大きな高い世界にみちびかれてゆく。その高

い大きな世界は、複雜微妙な人生、しかも生々息むことなく進展してゆく人生にそのまゝに隨順してゆく世界である。この樣な精神こそ、歷史的に古につらなり、又未來につらなつてゆく精神である。その中には宇宙も自然も含められ、我々はさうした大きな藝術的精神によつて、我々の足らはぬ小さな精神を、正しく雄々しくみちびいてゆくことが出來ると思ふ。それ故御製拜誦といふ宗敎的儀禮は、同信生活をおくるべき我々同胞にとつては、最小限度に要請せられてゐる實踐要件と云はねばならない。右に引用しまつゝた「しま〳〵も」の御製には、大御心の大きな力が大御心の內面からすべてのものを統御してゆく姿が窺はれるのである。

明治天皇御製は四十五年の長き御在世の間、世界の奇蹟といはれた明治日本の國家的發展を大御身自ら御開導遊ばされた　明治天皇が、寸暇なき御政務の間にも拘らず詠ませたまふたものである。

歷代御製中特に　明治天皇御製を國民宗敎敎典として　拜誦することの意義は以上によつて明らかである。大御歌のしらべはさながら神韻を帶び、民草を思はせ給ふ、否人間のみならず萬物を統禦せさせ給ふ偉大の宇宙意志を表現せさせ給ふものである。

九、和歌の創作と鑑賞の同信生活に於ける意義

同信生活の意義については前述してあるが、それは個々人の精神をつなぎ合せ通ひ合せてゆく精神生活である以上、言葉を媒介としてまきひろげられてゆくのであることはいふまでもない。我々は同じ國民であり乍ら、境遇も違ひ、年齢とか地位の差異もある。しかし乍らさういふ區別にはしたがひ乍ら、同じく　大君に忠義をつくさうと志す心を一つにむすび合はせてゆかねばならぬのである。共に　大君に忠義をつくさうと志す意志を、言葉によつて、他の人に傳へることにより、その人を感奮せしめ動かすことも出來るのである。

そして忠義をつくさうとすることが現實の色々な障害に遭つてさえぎられ乍ら、しかもそれを貫いて一すぢに進まうとすればする程、我々の心は悲痛な思ひにみたされ、それをあらはす言葉は散文から詩や歌の如く調子の高いものとなつてゆくのである。我々は忠義をつくさうと志すのであつて、忠義の語義はかくかくであると說明したり、日本精神とはかくかくのものであると分析したり、定義づけたりすると忠義をつくす道から遠ざかつてしまふのである。

所が日本精神論とか、忠孝論とかいふものが右の樣な單なる說明に終つてゐるのであつて、我々はさういふ樣な說明に陷らうとする危險をつねにいましめ合ひ、又さういふ說明に終始してゐる人々のあやまちをいましめ正し合ひ乍ら、我々の協力一致の生活を形式的に固定したものとせぬ樣にせねばならない。

そこにはつねにすなほな、そして切實な思ひをあらはす詩歌の創作が必要となつてくる。そこに宗教と藝術と學術とは渾然一體をなしてリヅミカルな生々した精神生活がまきひろげられて來るのである。殊に我國の和歌は、畏くも　明治天皇が神代ながらのしきしまのみちと示させ給ふ如く、神代ながらにつたへられて來たもので、そのしをりは畏くも皇室に仰がれ國民も敎養の如何を問はず地位の貴賤を問はずうたひつゞけて來たのである。和歌の詩型及びその國文學的研究は後にゆづることゝするが、この國民藝術ともいふべき和歌の思想的意義を我々は再認識しなければならない。俳句は趣向といふ如き理智的技巧を加へることにより、直接の思ひをありのまゝにのべることが出來なくなるが、和歌は直接に思ひをのべるのが本質である。それは決して、元來所謂月花のもてあそ

びではないのである。

和歌が月花のもてあそびとなるのは、作者の精神が國民生活の實體驗を遊離して個人主義的になつてゐるからである。かゝるうたの欠陷を批判しつゝよいうたを味ふのが鑑賞であつて、創作と鑑賞とはつねに併行して行はれねばならない。今日多く行はれてゐる短歌會などは、技巧のたくみさのみをきそふ傾向が多分にあり、それがうたを墮落させたものといはねばならない。

うたをよみ、うたを鑑賞することにより、我々の思想は不斷に鍛錬されるのである。我々が思想を鍛錬するといふことはすなほなをゝしき忠義のまこゝろをみがくことに外ならない。それ故うたが分らないといふ人にはどこか思想的に欠陷があるのである。それは一口にいへば「我執」があるのである。「我執」とは心のわだかまりであり、それは一すぢに忠義をつくさうとする意志をつねにさへぎるものである。この「我執」は誰にでも多少はあるのであるが、これを克服して柔軟で強靱な意志をきたえるのがうたの創作鑑賞である。それが　明治天皇御製に教示し給ふ所のしきしまのみちの實修である。それ故しきしまのみちの實修といふことの分らぬ人は結局最後の一點に於いて同信生活の分らぬ人であるといつても過言ではない。

遠隔の地にある友らに心通はせ、或は合宿生活に苦樂を同じうしつゝよむうたは、盡し得ぬ無量の思ひと永久の生命とをたゝふる高きしらべを有するのである。まこゝろを限りなき世にとゞむるまことの歌をうたひ上げつゝ、我らは共に大君に仕へまつらうではないか。

次に具體的作例について鑑賞批評を行はう。まづ今年十一月三日明治節に、東京都下の學生が府下小金井浴恩館で行つた合同合宿に於ける、しきしまのみち會のうた連作四首をかゝげよう。

かへりゆく友の姿はやみに沒し去りゆく足音きけばかなしも
くらやみの道遠ざかる足音をきゝつゝぞ思ふ友のゆくてを
いかならむことにあふとも手づさはりすゝみゆかむとちかひぬわれは
語るべきことどもあまたこゝにのこし別れし友のなごりをしきかな

所用あつて先にかへつてゆく友を歌つたものである。

合宿生活に於けるなごやかなしかもいつかしき生命のあふるゝ雰圍氣と、夕闇につゝまれるあたりの靜寂さの中に、去りゆく友を見送つてたゝずむ無量の思ひは、一首のうたにまとめられずして次々と連作の形式をとつてつきざるしらべとなつてわき出づるのである。

この「しらべ」は御製を拜誦し、志士のうたを朗誦し、古事記萬葉のうたをよみ、友らのよいうたをよむ中に、全體的に心に刻印されるのであつて、それが自らの情意の興奮するまゝに波うちあふれてくるのである。我々はまづ、このしらべのあふるゝまゝに言葉をつらね、その後で個々の言葉の語法文法についての吟味を周密に行ふのがよい。この周密な語法の吟味によつて又思想的鍛錬がなされるのである。

なんだうたなんかといふ氣でいざやり出しみると、やればやる程うたの道には奥行があることが分る。自分で非常によく出來たと思つてもみなが集つた時よむと意外に、上すべりしてゐたり言葉が浮ついたりしてゐることを發見して奮起するのである。

まゝゝろがこもり、しかも言葉が緊密で大地に密着してゐるうたといふものは、同信生活に沒入し忠義奉公のまことをつくす生活體驗よりはじめて生れるのである。それにひきかへ國民生活より遊離した個我偏執の生活を送る人は、いくらうたを作つても、その思想は作品の上にあらはれて、弱々しいうたしか出來ぬのである。例へば、西田幾多郎氏の

果しなき思ひにふけり夢のごと今日もかくしてくれはてにける

といふ樣なうたは、夢のごとく空々漠々として、意志のない精神生活を表現してゐる。いかに美辭麗句を並べてもたくみな言葉をつらねても、全體を一貫する統一意志がない。統一意志がないといふことは思想の無力といふことである。我々は天地もうごかす大和言葉の威力をうたひあぐるますらをのうたをつくる樣心がけねばならぬ。

明治天皇御製

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

十、古典の意義とその研究方法

イ、古典の意義

明治天皇御製

折にふれて

石上ふることぶみは敷島のやまとことばのしをりなりけり

この御製に古典の意義を仰ぎまつらうとおもふ。勿論和歌は藝術的表現であり、殊に　明治天皇御製の高き大みしらべは簡單に研究し盡しうべくもなく、そのまゝに全體的に我々の全精神活動に訴へて理解さるべきものであること論を俟たない所である。しかし和歌それ自體は決して論理を否定したり、それと矛盾するものではなく、超論理的な性格のうちに論理を生かして　生命全體の威力を示すものである。今この大御歌の中から、古典の意義といふ論理的一面の分析と抽象とをしようとするのであるが、それは決してそれだけで十分に御製の意義を明かにしたものでないといふことは、前以て斷つて置かねばならない。

「石上ふることぶみ」と申されたのは古典のことである。

古典は敷島のやまとことばのしをりであると申されて居るが、「敷島のやまとことば」といふのは日本精神といふことであると思ふ。「ことば」は勿論古典には「文字」として書き傳へられて居るのであるが、文字は決して文字として意味あるわけではなく、その文字を書きしるした、或は語り傳へた人或は國民の精神をさながらに偲ばしむるところに意味を有するのであつて、それ故に直ちに「ことば」を精神であると解することも許されるのである。故にやまとことばは日本精神であるといふことになる。それゆゑ日本精神のしをりとなるものでなくしては古典といふことは出來ない、といふ所に、この御製の論理的一面を抽出しうると思ふ。

我々は足らはぬ自己の全身心を傾けて「大君にまめやかに仕へまつらむ」と努力し、苦闘するのであるが、この生活には常に「しをり」が必要なのである。我々はこのしをりを我々の現代の同信生活の中にも勿論見出しうるのであるが、それが歴史的生命にふれ、祖先、先人の人生體驗にふれるときに始めて我々の同信生活そのものも、ゆるぎなき歴史的生命の上に立脚して、將來に祖先の意志を我等の意志として生かしてゆくことが出來るのである。

我々の體驗は限られ、我々の認識の能力には限界がある。誰か安閑として生をむさぼりつゝ忠義を盡しうると考へるものがあるだらうか。一度び忠義をつくさんと決意する限り、我々の生活はその決意の一直線上を自己回轉する自然現象の如く無意志に動きゆくものではないことは勿論であり、我々の臣道感覺は不斷に崩壞の危殆に頻しつゝあるのであるからして、念々にその緊張を持續してゆかねばならない。更に實際の我々の生活は複雜多岐に亘る種々相を呈してゐるのであつて、之等の複雜なる實人生に接して、如何に處すべきかを我等は古人の言行のうちに問ひ求めねばならないのである。

我々の限られた體驗は、かくして三千年に亘つて古人の努力し苦闘してきた體驗を、己が體驗を通じて生かして來ることが出來るのである。かくして我々の體驗に密着して古典を研究し、それを現實の我々の實生活に活現せしめることが出來るのである。

現代の學生は多く流行書籍を熱讀するのであるが、この古典のもつ意義に想到して、古人の生命の息吹きにふれ、その體驗と思想とを自己のそれとして、生きしめることを怠るものゝやうである。

又たとへ古典を研究しても、その研究方法が誤つてゐる場合は無意味であるけれども、現代人の通弊は古典をよます、從つて、その思想を深く悠久の史的生命に根ざさしむることを怠り、その人生觀は流行思想のまに〳〵浮動し、動搖してゐる。しかし平時無事の時にはこの人生觀の誤謬脆弱性はその缺陷を暴露しないですましてゐられるのであるが、事ある時に際し、その缺陷は自づと現はれて來るのである。

況してや、學術は人生觀にその基礎を置くものであるからして（叢書第二輯、研究方法論參照）、この人生觀が史的生命に根ざすゆるぎなきものでない限り、その上に建設せらるべき學問が、果して如何なるものであるかは想像に難くないであらう。

我々は臣道實踐の體驗と認識のために古典を讀むのであるといつたが、このことは何もそれらの書物に「忠」といふ文字が書かれてゐることが必須要件なのではない。例へば我々は親鸞の宗教生活をうかゞひうることによつて、我々の思想內容を豐富ならしめ、感覺を鋭敏にすることが出來るのである。それも要するに、親鸞の藝術的人生觀がそのまゝに、自然隨順の神ながらの道と相通ひ我々が國體隨順の精神生活を送る上に、親鸞の生活體驗が非常に多くの示唆を與へてくれるからなのである。それは國體隨順と我々の臣道生活から分離せるものではなくして、むしろ「忠」を說き

つゝも、その思想生活が流動する詩的生命を傳ふることなく、正しき批判的精神を我々に與へない所の多くの他の書物よりも、一層複雜なる實人生の戰に耐へうる彈力ある生命を我々に與へて與れるのである。そこに我々は「忠」の心理學を學びうるのである。

四、古典の研究方法

生命は生命にふれることによつて始めて生れる。これが生命の原則である。

古典を讀むに當つては、この原則を一貫する以外に道はないのである。

我々は古典のうちに滿ち溢るゝ生命を感得しなければならない。それは、コトバを通じて、そのコトバによつて表現せられた精神に直接的に觸れる、コトダマに觸れる、こゝに始めて我々の生命はその生長の泉を見出しうるのである。

體驗とは單に事實によつて波動を與へられた精神ではない。眞の體驗とは實は事實に感應せる精神の統一せられる過程であり、統一せられつゝ動いて止まず、止まることを知らぬ生命そのものである。それ故に體驗は原理なくしては獲得せらるべくもない生命の統一態であり、われ〳〵の攝取すべきはこの統一せられつゝ生きつゝある生命のリズムそのものである。

體驗は原理によつて統一せられた精神過程である以上、この精神過程を研究するには、研究主體たる自己も亦この原理を常に內心に把持し、或は把持せんと努力しつゝ古典をよむのでなければ、古典のもつ生命そのものに觸れることはもとより不可能である。例へば、山鹿素行の「中朝事實」を讀む場合にせよ、素行が「中朝事實」を書かざるを得ざりし如き當時の思想界の紊亂を想ひつゝ自らも又「一すぢに大君に仕へまつらむ」との希念をこめて、己が全體驗をこの一點に集中して之を讀むに非ざれば、決してそれは理解せられないであらう。從つて、必ずしも多くの古典を讀んだからとて、それだけでその人の體驗と思想が豐富になるわけのものでもなく、漫然と古典を讀むだけでは「論語讀みの論語しらず」に外ならぬであらう。

從つて我々は古典を讀むに當つて、決して現代インテリ通有のあの多讀主義に動かされてはならない。勿論吉田松陰先生もいはれたやうに「自非讀萬卷書安得千秋之人」といふことは眞理であるけれども、いくら書物を讀んだからとてそれが以上の如き痛切の體驗を通じて生かされるものでない限り、それは無益の勞作に終るであらう。

かくして古典の讀破はそれを單なる知的對象として研究することを意味するのではなく、常に信順ひつゝ即ち信順の態度を以て讀まるべきである。勿論古典中にも尙誤謬なしとしないのであるが、この誤謬も眞にその古典のもつ本來の生命そのものに信順せんとするの謙虛な生活態度を以てせざれば、之を見出すことすら出來ないのである。

かくして、祖先の生命への信順生活のうちに、まことの感謝は生れ、永久生命のゆるぎなき確信を與へられるであらう。かゝる信順生活にこそ、始めてあの自己神化教（ヘカストタイスムス）といふイマハシイ增上慢から我々を脫却せしめる唯一の契機が存するのである。

最後に一言、この古典の選擇といふことが如何に至難のものであるかといふことを我々は知らなければならない。われ〳〵はこれを、我々の信ずる正しき師に學び、自己の眞劍なる臣道實踐の體驗に照しつゝ、それの持つ價値を、あるときは確認し、又あるときは批判しつゝ、一すぢの道を、即ち臣道實踐の道を歩みゆくべきである。

古典の研究はかくして、信順の態度を以て始めて出來るのであるが、この信順意志が我々の內心の思想生活を不斷に統御するとき、そこに始めてこの意志への反抗者に對する猛然たる、不斷の「戰」が開始せらるのである。

信順生活に生れるものは體驗の告白である。

戰に生れるものは批判戰である。

體驗の告白と批判とが相即してこゝに精神科學研究の目的を達成してゆくのである。

八、外國古典研究の意義

古典が眞に古典たる所以は、それは一時代の所產に止らずして、不朽の生命を保持するところに在ること旣述の通りである。そして古典といふ時、それは何よりも先づ國語の生命に觸れることから始めなければならぬ以上、同一國語を語り又書くところの同一民族國民の古今一貫せる歷史の流れが、古典の活きてはたらく場所であることといふまでもあるまい。殊に吾國の如く蒼古より「言靈のたすくる國」又「言靈の幸はふ國」と云ひつぎ來つた國家に於ては、まづこの世界無比の文化價値を有する大和言葉の高きしらべと深き含蓄とに味到しなければ、それは日本の古典の生命を汲むことはできない。記紀の神話を今日の理知判斷によつて論理的に分析し、その意味を探つてゆくと

いふ如き、いはゆる合理主義的方法にのみ頼つて研究するならば、古典「記紀」は遂に永久に緘默して自らを語りいでぬであらう。それゆゑ國語の「言靈」に信順してそこに古今を一貫せる民族國家の史的生命を感得するといふのが、誠の古典研究法たることは、前述したところで明らかである。

我國の古典に就ては以上の如き信順の態度が要請せられるのであるが更に進んで外國の古典に對しては我々はいかなる態度を以て臨むべきであらうか。次に之について一言しよう。原則的にいへば、古典研究の態度としての「信順」といふことに於ては自國と他國との區別はないと思ふ。新約四福音書の如きは、國教としてキリスト教を奉ずる歐米諸國民にとつてのみならず、我々日本人にとつても又一つの古典であるといふことができる。イスラエルの愛國者イエスが、祖國滅亡の危機に直面して痛切に味つたところの人生の涯底に徹する如き深刻の體驗をつたへた精微の言葉は、今日尙われらの心魂をゆするものがある。われらが有する數々の高貴なる日本古典にも決して劣ることなく、亡國の志士イエスの言辭は切々として我らの胸を打つのである。それは彼が、祖國の滅亡といふ人類最大の悲劇のたゞ中に、國民精神の恢復を念じつゝあらゆる亡國思想——パリサイ・チドカイ——と戰ひぬき、遂に戰場に倒るゝに至つた悲苦の生涯が、よく萬人を感動せしむる普遍

的價値を有するからである。文化は國家と共にあるのだ。否一切が國家と共にあるのだ。祖國の爲に獻身する者にして始めて、眞の文化の何たるかを識る。それ故、我らは國語を通じて吾國古典の生命を汲み、それを現代に活かさむとする意欲に基いて外國の古典を、出來るだけ博く讀むべきはいふまでもない。たゞ玆に注意さるべきは研究の主體があくまでも我々日本人であるといふことの明確な自覺である。吉田松陰は「講孟余話」の冒頭に「經書を讀むの第一義は、聖賢に阿らねこと要なり。若し少しにても阿る所あれば道明かならず、學ぶとも益なくして害あり。」といつて孔孟が生國を離れて他國に事へたことを「濟まぬことなり」と、日本的信念に立つて痛烈に批判してをる。これが廣く外國文化を批判攝取せんとする際の日本人に一貫せる見識であるが、特に外國古典に對する我々の研究態度は玆に餘すなく喝破表示せられてゐると思ふのである。

しからば松陰のこの痛烈なる批判精神は何處に由來するものであらうか。眞の批判は常に確乎たる原理に基いてのみ行はれうることを思ふならば、松陰の學問研究の原理は抑々何であつたか。それは「講孟余話」第一場の終りにみえる次の一節に明らかである。

「聞く、近世海外の諸蠻、各々其の賢智を推擧し、其の政治を革新し、駸々然として上國を凌侮す

るの勢あり。我れ何を以てか是れを制せん。他なし、前に論ずる所の我が國體の外國と異る所以の大義を明かにし、國國の人は國國の爲めに死し、國藩の人は國藩の爲めに死し、臣は君の爲めに死し、子は父の爲めに死するの志確乎たらば、何ぞ諸蠻を畏れんや。」

「我が國體の外國と異る所以の大義」とは、之を今日の言葉に飜譯すれば、日本は諸外國と文化の開展階次を異にするといふ意味である。前に說明したが、日本は一般國家概念を以てしては到底盡しえぬ內容を有し、そはたゞ日本とのみよばるべきものであるといふ言葉の意味するところは、即ち日本は既に確立せられたる「東洋文化單位」であり、西洋文化單位形成の途上にある歐米諸國家の如き未成熟或ひは敗殘國家に比すれば、より高度の開展階次にある國家なりといふことである。何となれば世界史は國家興亡の抗がひがたき鐵則によつて人類が縛ばられてをることを敎へてをるが、而もなほ我々は祖國日本は亡びず、神州は永久に不滅なりの確信を有し、この確信は三千年の國史の苦鬪が實證してをるところであるからである。この「神國日本」の自覺が、又外國古典を讀む場合の先決條件であつて、キリスト、ゲーテ、釋迦、孔子といふ如き人類最大の偉聖も天皇の下にあつては我らとひとしく臣民たるの地位を脫しえぬのである。一君萬民とは日本國家の秩序たると共に、かくて人類の歸趨すべき永遠の秩序に外ならぬ。といふ事實が又外國古典の研究によつて愈々確實に理解せられ、この精神の具體的實現が將來の日本の課せられた世界史的使命である。

二、日本古典についての簡單な解說

一、古事記

建國の事實と精神とを表現せる一大叙事詩として、反覆朗誦、ことそぎと力ある古語の語感に直接感觸し、正岡子規が「强き和文」と評せるその强靱雄勁の言語表現に、反省冥想の餘裕もなかりしわが祖先らの民族移動の動亂的人生觀を感得すべし、スサノオノミコト、ヤマトダケノミコトの傳說、仲哀天皇崩御の條など。

二、日本書紀

本居宣長は主として言體の藝術的鑑賞の上から、書紀は漢意の混在するものとして、その點純粹な日本語でかゝれた古事記の方を一層重要視したのであるが、詳細な史實を年代記的に知らんとすれば書紀を讀まざるべからず、要するに「記紀」は常に兩者を比較參照しつゝ讀誦研究しなければならぬ。

三、聖德太子三經義疏——世界聖典全集、大日本文庫

法華經、維摩經、勝鬘經の三つを太子御親ら註釋講說せられしもの、個人の著述としては吾國最古のもので、

日本文化の父としての太子の偉大沈痛の御精神は、現代青年のひとしく仰ぐべき所である。佛教を中心とする當代の大陸文化をいかに批判攝取せられて以て日本文化創業の基礎を確立せられたかは、特に黒上正一郎氏著「聖德太子の信仰思想と日本文化創業」の一卷に於て、周密綜合的に論究されてをる。太子研究書としては今日之以上のものは一寸見當らぬから、有志は是非一讀せられたい。因みにこの書は今や全國の大學高校、專門校同信團體のテキストとして心ある者の間にはあまぬく普及してをる。同書は第一高等昭信會設行であるが、同會は故黒上氏が昭和四年に全國の同志に魁けて創立し、爾來十年の苦闘を經て、今や全國的學生思想運動にまで展開してをる。この書を朝夕に播讀して、行間に溢るゝ今は亡き著書の悲願をうけつがんとする決意こそ、實にわれらが同信生活の基調を爲してをることを最後に附言してをく。

四、萬葉集

萬葉集の名をしらぬ者はないが、卷二十の「防人の歌」の價値を認める者は少ない。人麿や憶良の歌と共に否それ以上に「防人の歌」こそ萬葉集の生命をして不朽ならしむるゆゑんのものである。卷頭の御製を拜誦し、次いで防人の歌を朗誦するのが萬葉集の正しきよみ方であるといつて誤りはない。

五、慈圓の愚管抄——いてふ文庫、古典研究文庫、國史大系

吾國最初の歴史哲學書としてその價値は夙に史家の間に高いのであるのが、一般にはその文章の難解の爲嘗

及してゐない。當時の日常語によるまとまつた史論として、中世思想史上見逃すことのできぬ著述である。因みに作者慈圓は天台座主鎌倉時代初期の人。

六、北畠親房の神皇正統記——岩波文庫等

冒頭の一句「大日本は神國なり」は誠に中世における國體不明徴の暗黒時代を貫く不滅の光明であつた。建武中興を導いた精神はこの書に具現し、これが遠く明治維新をよび起したのである。建武中興といふ時代を背景にしてたゝかひぬいた親房のこゝろを、直ちにそのまゝ今日の我らのこゝろとしなければならぬ。

七、道元の正法眼藏、正法眼藏隨聞記——岩波文庫等

狹い宗派から漸く開放された道元の研究は、今や流行哲學者の理知的再構成によつて「絶對辯證法」の哲學といふ如きものに變形され、再び狹い學界に占有されんとしてをる。道元の言葉を日本人の實體驗に密着せしめてたゞちに我らのものとし、コトノハノミチの達人として仰ぐのが我らの態度である。

八、親鸞上人文集——有明堂文庫、眞宗聖典、岩波文庫等

和讃、末燈抄、御消息文などが中心である。佛教の信仰をその概念的固定からとき放つて、人間心理のあるがまゝの事實の上に現實化したのが親鸞の宗教改革である。「和國の教主聖德皇」に始る日本佛教は、玆に始めて國民宗教としての地盤を確立した。親鸞の言葉は同信生活の高きしをりである。

九、源實朝の金槐和歌集——岩波文庫等

「人間の後の歌よみ誰かあらむ征夷大將軍源實朝」と正岡子規が感嘆措く能はなかつた、薄命の詩人實朝の歌集である。「山にさけ海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも」と歌つた實朝は民政幕府專制の亂世に、身は將軍の地位にありながら熱烈素朴の忠誠心を忘れなかつた稀有の存在である。

十、山鹿素行文集——有明堂文庫等

聖教要錄、配所殘筆、中朝事實、謫居童問　山鹿語類(聖學)などから讀むのがよい。近世に於ける最も綜合的學者としての素行の全學術大系の研究は未完成であるが、その學者的生涯、態度などは自叙傳「配所殘筆」によつてよく窺はれる。これは自傳即思想史であり、就中、率行呼出しの直前に立ちながら認めた有名な遺書の如きは青年學徒の再思三讀すべきもの。眞の學問とは何か眞の學者とはいかなる者かをはつきりと敎へらるゝであらう。

十一、本居宣長全集——吉川弘文館、岩波文庫等

「なほびのみたま」「玉櫛」「玉かつま」「うひ山ふみ」「玉梓百首」などがすぐ讀めるもの。「古事記傳」は古事記を讀む際折にふれて播讀したらよい。宣長の如き餘りにポピュラーになつた人の思想は、常識的な他人の解釋にとらはれることなく、直接原典の言葉に體當りして體驗的に味識すべきものである。

十二、吉田松陰全集——岩波書店

「留魂錄」「講孟余話」などから讀み始め、かたはら書簡集、日記などを播讀するのがよい。あくまでも臣道探究者としての松陰の苦鬪生活を憶念する氣持を忘れず、その外形に捉はれずに直ちにその求道心の熱烈さに共感すべきである。そこから出發して始めて政治家、教育家又家庭人としての彼の全貌が明らかにされうるのである。

十三、幕末志士の歌——勤王文庫、川田順著幕末愛國歌集等

三條實美公の歌——續日本歌學全書所載「梨の片枝」等

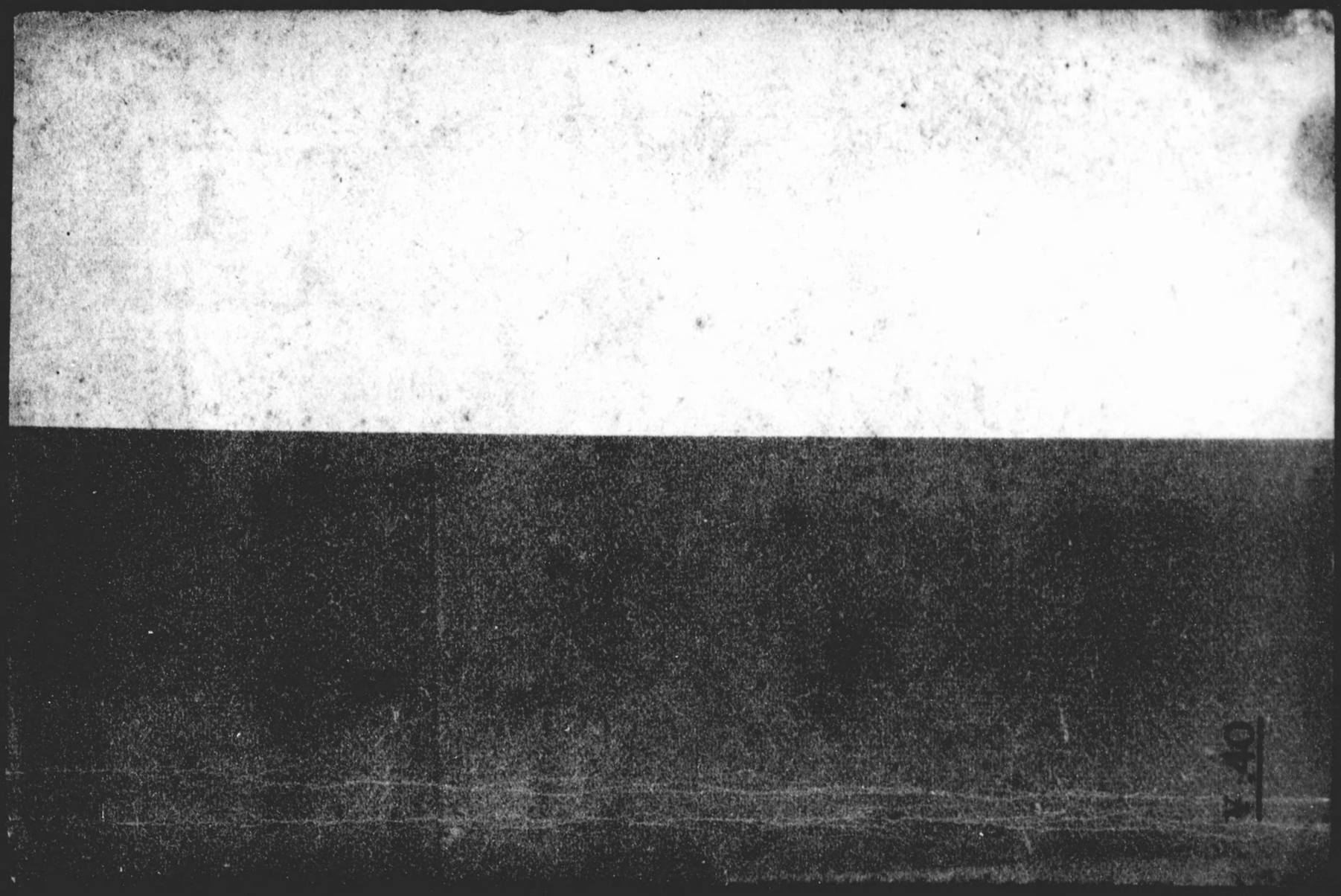
これらに就ては「學生生活」七月號「シキシマノミチと國家生活」及び同誌十二月號「明治・大正・昭和國民思想史」を參照せられたい。尙明治以後の「古典」としては十二月號の各思想家の欄をよまれたし。

それから「學生生活」五月號特輯「日本思想の系譜」は是非一讀せられんことを望む。

「新學生生活論」 學生生活叢書第一輯 定價金四拾錢

昭和十四年十二月二十五日印刷
昭和十四年十二月二十七日發行
昭和十五年八月十五日再版

編輯兼發行人 田所廣泰
印刷人 鈴木泰次郎
印刷所 朝日印刷營業所
東京市芝區新堀五丁目一番地
電話芝一八七三番

發行所 日本學生協會
東京市赤坂區青山北町一丁目一番地
振替口座東京一二、〇九八六番

414
484